【論文】

主婦を問い始めた女性たち

――田中喜美子および和田好子のライフヒストリー――

池松　玲子 *

高度経済成長期には，性別役割分業を元に主婦は戦後の女性の一般的なライフスタイルとして定着したが，1970 年代に第二波フェミニズムの影響が広がるにつれ，生き難さを感じる女性たちによって主婦という生き方が問題として捉えられるようになった．本稿では，高度経済成長期に実際に主婦として生き，育児終了期からは投稿誌『わいふ』を発行して，主婦に自由な言論空間を提供する活動を実践してきた田中喜美子および和田好子に着目し，両名のライフヒストリーの分析を通して，主婦という生き方に疑問をもち始めた女性たちについて考察した．

両名は高学歴で余裕のある層の主婦だったが，育児終了期には各々が主婦という生き方に不満と葛藤を抱いていた．その原因は，和田にとっては育児による自立的な生き方の喪失であり，田中の場合は恵まれた環境にある主婦の相対的剥奪として生じたアイデンティティの揺らぎだった．両名が抱いた類の主婦の問題は，その後に続く世代の女性たちにさらに顕著になっていった．それにつれて主婦として生きる女性の生き難さが女性の問題として社会に認識されていき，その生き難さへの気づきが重要な画期を作っていった．両名はそうした画期を作った女性たちの先駆けといえる存在だった．

キーワード：主婦，ライフヒストリー，雑誌『わいふ』

1　はじめに

1-1　目的

本稿は，戦後の主婦についての社会的な文脈における理解を手掛かりに，田中喜美子および和田好子のライフヒストリーの分析を通して，主婦 [1] という生き方に疑問をもち始めた女性たちについて考察するものである．

無職の妻･母として家事･育児を担う主婦というライフスタイルは高度経済成長期（1954-1973 年）に定着し，女性の一般的なライフスタイルとしてモデル化された．この時期に男性が「企業戦士」や「会社人間」として経済成長を支えたとすると（天野 2001：10），専業主婦として家事，育児，看護・介護にとどまらず，地域や学校等に関する活動を一手に引き受け社会を支えたのは女性である．政府や企業もこうした女性の役割を認識し，例えば，税制（夫の配偶者控除，配偶者特別控除），年金制度（第 3 号被保険者），企業の配偶者手当等によって無収入／低収入の主婦を支援し，夫稼ぎ手・妻専業主婦という家族モデルを善きものとして推進してきた．

ところが，1970 年代に第二波フェミニズムの影響が浸透してくるにつれて，主婦ライススタ

* 本学大学院博士後期課程 人間科学研究科生涯人間科学専攻

イルに疑問をもつ女性たちが現れ始め，そうした女性たちの気づきが主婦というあり方を見直すという社会的な動きの契機となっていった．だが実際には，主婦ではない生き方を求めても，その実現には困難が伴った．なぜなら代わる存在がないまま，家族や地域をバックアップする主婦が不在になることは様々な不都合を招くことになり，しかも夫稼ぎ手・妻専業主婦モデルを善きものとする規範の中では，批判は主婦当事者に向いてしまうからだ．そうした状況下，主婦ライフスタイルを維持したままで就労可能な雇用形態として「パート」が受け入れられるようになり，1975 年から 80 年の間に主婦の「パート化」が顕著になっていった（原・盛山 1999：163-164）．それに伴い，家計補助的就労の必要性が低い層の主婦は「就労しない理由」を探さねばならない事態となり，主婦アイデンティティに「揺らぎ」が生じ始め（国広 2001：40），主婦は必ずしも女性の安定的ライフスタイルではなくなっていった[2]．このように，主婦役割を担うこととフェミニズムという二方向からの主婦当事者への社会的期待にジレンマを感じ，各々の立場で悩んできたのが戦後の主婦と呼ばれる女性たちであろう．

しかし，こうした戦後の主婦についての概括的な理解からは，主婦ライススタイルに疑問をもち始めたのはどのような女性たちなのか，そうした女性たちは実際にはいかなる葛藤や困難を抱え，いかにしてそれらが主婦ライフスタイルから生じる問題であると気づいたのかといった詳細はみえてこない．そこで本稿では，高度経済成長期に実際に主婦として生き，育児終了期からは投稿誌『わいふ』[3] を発行して，主婦に自由な言論空間を提供する活動を 30 年に渡り実践してきた 2 名の女性，田中喜美子と和田好子に着目した．両名は主婦というあり方を疑いつつ，同様に生き方に不安定さを感じアイデンティティに揺れを経験しながら「主婦とは何か」と問いかける会員主婦を支えてきた．両名はどのような人生を歩んできたのか．そのライフヒストリーの分析を通して，自らのライフスタイルに疑問をもつようになった戦後の主婦について考察する．

『わいふ／ Wife』[4] についての研究としては，第 2 期の『わいふ』を 1970 年代のウーマン・リブの影響下に生まれたサークルのひとつとして論じた天野（2005）の研究，「自分探し」の例としての「私」語りという自己表現について同誌をとりあげ論じた高橋（2005）の研究，豊田（2013）による同誌の継続性と投稿者の問題提起について第 1 期の同誌を対象にした分析，同じく豊田（2014）の，第 2 期 1970 年代から 80 年代における同誌の存在意義を考察した研究等がある．これらの研究でも田中と和田について触れられていないわけではないが，両名のライフヒストリーに焦点をあてたものではないので，その点でも本稿でこれを取り上げる意義がある．

1-2　方法およびデータ

本稿では，ライフヒストリー法を用いて田中喜美子と和田好子の人生における一定期間の主観的現実／意味世界を明らかにする．ライフヒストリー法とは，個人の人生について語られたライフストーリー，日記や手紙等の文書資料，専門的知見を含んだ文献資料，同時代的資料等を用いて個人の歴史を再構成し，研究者のテーマにそって読み解く研究実践である[5]．本稿では日記や手紙に代わる文書資料として，『わいふ』誌および同誌による出版物もとりあげた．また，一次資料であるライフストーリーの収集については，「語り」がインタビューの場における語り手と調査者との相互行為を通して構築されるものであるという認識をもち，「語り手自身の概念，カテゴリーの定義，語りのコンテクストを尊重する」（桜井 2002: 28）ライフストーリー・インタ

ビューを採用した．田中と和田は過去に何度もインタビューを受けた経験があるので，特定の質問には答えが準備されている可能性がある．しかしライフストーリーを「それぞれの価値観や動機によって意味構成されたきわめて主観的リアリティ」（同 : 39-40）と捉えれば，調査者との相互行為の中で新たに構築される，これまでの語りとは異なる語りが得られることもあり得ると考えたからだ．

調査は 2013 年 9 月から 2015 年 2 月にかけて，田中に 5 回，和田に 4 回，「株式会社グループわいふ」の事務所において実施している．両名の語りから得られたデータの概要を時系列に整理し以下に示した（表１）．

表１　和田好子と田中喜美子の年表

	和田好子		田中喜美子	
1929年		現在の東京都品川区で生まれ、東京都芝区田村町（現在の港区西新橋）で６歳まで過ごす。		
1930年				現在の東京新宿区に生まれる。雙葉小学校附属幼稚園に入園するも年長クラス時に小児結核に罹患し、父親の海外転任もあって母方の実家に預けられる。
1936年	6歳	東京都芝区田村町の小学校へ入学。両親が離婚したため母親とともに父の家を出る。		
1939年	10歳	母親が急死したため父親に引き取られる。	9歳	両親の帰国に伴い東京へ戻る。
1941年			11歳	雙葉小学校に5年生で編入。
	太平洋戦争開戦			
1942年	13歳	神奈川高等女学校入学。		
1943年			13歳	雙葉高等女学校入学。
1944年	15歳	勤労動員	14歳	勤労動員
1945年	16歳	勤労動員	15歳	疎開
	太平洋戦争終戦			
1946年	17歳	女学校卒業。童心座に就職。		
1947年			17歳	結核再発により地方のサナトリウムに入所。
1948年	19歳	童心座を辞職。	18歳	東京に戻るも、雙葉高等女学校を退学。
1949年	20歳	この頃に俳優座戯曲研究会に入会。	19歳	
1950年	21歳	この頃に田鎖速記研究所に入学。	20歳	語学学校に通い、ピアノを習い、社交ダンスレッスン等を受けていた。
1951年	22歳		21歳	
1952年			22歳	ダンス教室で出会った早稲田大学の女子学生に触発され、大学受験を目指し予備校に通う。
1953年	24歳	経済時代社に速記者として入社。	23歳	早稲田大学仏文科に入学。フランス文学研究者を目指す。
1956年			26歳	結婚
1957年			27歳	大学院に進学。
1958年	29歳	結婚。フリーの速記者に。	28歳	夫の留学に同行し米国へ。早稲田大学大学院を退学。
1961年	32歳	長女出産。	31歳	帰国し出産。
1963年	34歳	夫の転勤で関西へ転居。	32歳～	この頃から翻訳者として日本の詩の仏語訳に取り組む。「専業主婦」として過ごす。
1964年	35歳	『わいふ』に入会。		
1965年	36歳	長男出産。		
1968年	37歳	この頃から小学校のＰＴＡに関わり始める。		
1971年	42歳	夫の転勤で東京に戻る。田中喜美子と出会う。全国PTA問題研究所に入会。	41歳	和田好子と出会う。全国PTA問題研究会に入会。
1976年	47歳	『わいふ』副編集長に。	46歳	『わいふ』編集長に。

2　自立を目指したリアリスト――和田好子のライフヒストリー

2-1　自立的な生き方の模索――読書経験と速記者という職業

和田好子は，『わいふ』副編集長という立場のせいか，外部からみると田中喜美子と比較して注目されてこなかったという印象がある．しかし実際の和田は田中の影に埋もれるような控えめな女性ではない．

和田は 1929 年に，東京都内で中小規模の繊維関係製造業を営む家庭に生まれた．両親の離婚や母親の急死，さらに父親の再婚のため，やや複雑な家族関係だったにもかかわらず，大家族の中で伸びやかに暮らし，好奇心旺盛で読書好きな少女として育った．太平洋戦争の始まった 1941 年に，和田は神奈川高等女学校[6]に進学した．当時の高等女学校[7]は，いわゆる「良妻賢母」を理想とする教育方針が一般的だったが，同校は創立の理念として女性の自立を掲げていた[8]．その一例として和田は「修身の授業で，女性が 25 歳になると親の許可なく結婚できますって教えたのよ．私それで大喜びしてね，25 まで待とうと思いましたよ．そんなこと教える学校ってなかったですよ」（聞き取り 2013.11）と語っている．

また，戦時下にもかかわらず同校の図書室では読書の制限がなく，欧米の翻訳本が撤去されることもなかったため，知的好奇心旺盛な和田は難解な文献を手当たり次第に読破した．記憶に残る例として，文語体で書かれた『フランス大革命史』[9]や『古事記』の原文等をあげている．こうした読書経験をめぐって和田は「高等教育を受けていないから，いわゆる雑学でいっこうにとりとめがない」とはいえ「情報の蓄積も三十年にわたれば，それをしない人とは違ってくる」（『わいふ』1972 年 93 号：5）と自負心を覗かせている．系統立った学びではなくとも多岐にわたる読書経験によって，和田は知識を吸収し思考力を培ってきた．また「高等教育を受けていない」といっても，和田が入学した頃の高等女学校進学率は 20％前後であり（稲垣 2007: 6），卒業後に，後述する田鎖速記研究所で速記を学んだことをも考慮すれば，和田は当時の高学歴女性といえる[10]．

神奈川高等女学校では就学期間[11]の前半 2 年間は授業があったが，後半 1944 年から学生は勤労動員され，和田は陸軍の弾薬庫で銃弾に火薬を詰めるという危険な作業に従事した．1945 年の終戦は夏休みに滞在していた家族の疎開先で知り，和田はその際の記憶を以下のように語っている．

> 私は荷物を取りに，いったん戻るって言ったんです．荷物を持ってきてないからね．そしたら，皆が止めてね．東京は怖いからやめたらいいと言ったんだけど，きっと騒動があるだろうと面白くて，好奇心いっぱいで，行ったんですよ．（聞き取り 2014.11）

周囲の制止も聞かずに，寄宿舎に置いてきた荷物を取りに終戦直後の東京へ行ったという，好奇心旺盛で行動的な和田の性格が表れた語りである．

爆撃により家屋を焼失し家族で地方に疎開していたため，卒業後の上級学校への進学が危ぶまれた和田は，「私に枕草子を教えてくれた先生の家にいって，女中さんみたいにそこに置いてもらってどこかの学校に入ろうかと考え」（聞き取り 2014.11）訪ねて行ったりもした．困難な状

況でも諦めずに進学の方策を模索する和田の様子が語られている．結局進学は断念せざるを得なかったが，女学校卒業式に校長から「あなたのことはよく聞いています．上の学校には行けないそうだけど，勉強はやめちゃいけない，勉強は続けなさい」（聞き取り 2014.11）と言われたことを和田は忘れられなかった．これらの語りからは，自立をめざして自らの人生を切り開いていこうとする和田の姿勢をみることができる．

家業を再開した父親が 1947 年には渋谷区代々木に家を購入したので，家族はようやく東京に戻り，女学校卒業後に和田は 17 歳から 19 歳まで童心座 [12] という人形劇団で働いた．給与は少なかったが，著名な童話作家 [13] らに混じって上演作品を書くこともあったので，和田にとっては望ましい職場だった．何かしら書き続けたいと希望していた和田は，劇団は辞職したが，劇団関係者から勧められて俳優座戯曲研究会 [14] に入会している．

また，21 歳から 22 歳の頃に「女性が食べていける職業」と新聞で紹介された速記者という仕事を知り，当時目黒区自由が丘にあった速記専門教育機関である田鎖速記研究所 [15] に所属した．そこで 2 年間勉強して資格を取得し，24 歳頃には「経済時代社」[16] に速記者として雇用された [17]．「コネ」つまり人脈があって就業時間外に個人的な依頼を受けることもあり，5 年後に結婚した当時の収入は夫の給与と同程度だったと和田は語っている [18]．結婚後も「フリー」として第 1 子出産まで働き，速記者として通算 8 年程度働き続けた．自立可能な収入が得られるだけでなく，速記者は多様な分野の著名人に会う機会の多い職業だった．文学者だけでも，谷崎潤一郎，安部公房，三島由紀夫，永井荷風，野上弥生子らへのインタビューの速記を担当したことがあり，彼らの話を聞くことで知識の幅が広がったと和田は語っている．

2-2　主婦ライフスタイルへの不満と PTA 活動のもつ意味

速記者として働くということは多様な分野の知識・情報を吸収することでもあり，そうした経験によって和田は現実を見極める力をつけた．例えば，復員した兵士たちの座談会の速記を引き受けた際に，復員兵が控室で戦時下の女性との性行為を自慢気に話す様子を見聞きし [19]，「とにかく恐ろしいからね．何してきたかわからないから」（聞き取り 2014.11）と結婚相手には戦争に行かずにすんだ年代の男性を最優先に考えるようになった．さらに「私が本を読んだり物を書いたりするのを嫌がらない」（聞き取り 2014.11）男性であることの重要性にも気づき，結婚相手にはこの 2 点を求め，俳優座戯曲研究会時代に出会った年下の男性を選び自ら求婚した．

大企業に勤務するいわゆるホワイトカラー職のその男性と，和田は 29 歳で（1958 年）結婚し，1961 年に長女出産後，1963 年には夫の転勤で兵庫県宝塚市に，次いで大阪府千里ニュータウンに転居し，1965 年に長男を出産，1971 年に再度の転勤で東京に戻り，通算 8 年間を関西で過ごしている．『わいふ』300 号（2003 年）に掲載された「昔の私，今の私」という記事に和田の関西時代の写真がある．写真の和田は愛らしい顔立ちの小柄な女性であり，夫は長身で知的な印象の男性である．

関西で専業主婦として暮らした 8 年間には，投稿誌『わいふ』の会員になったことおよび PTA 組織改革を実行したことが，和田にとっての重要な出来事と認識されている．創刊（1963 年）間もない『わいふ』を他誌の紹介記事で知り，和田は第 1 子が 3 歳の頃（1964 年）に会員となった．同誌にとって和田は「変な投稿が来て困ると私が反論を書き，投稿が少ないときに書いてく

れと頼まれる」（聞き取り 2013.11）ような有能な書き手だった.

同時にこの 8 年間は和田にとって葛藤の多い時期でもあった．当時速記の仕事や戯曲を書く場などは東京に集中しており，また転居による孤立した状況下での育児という困難を抱えていたため，就業や自己実現の機会を失ったからである.「当時の実感としては気が狂わないのが幸いという状態でした」(『わいふ』1970 年 77 号 : 10-12),「私はこんなことをするために生まれてきたのかしら．と思い始めると，めんめんと子どもの存在のマイナス面だけが数え上げられてくる」（同）などと記して『わいふ』に投稿している．母親による育児が当然視されていた時代に，子どもが女性の生き方を狭めると率直に発信している.

そうした中で，和田は小学校の PTA 組織の改革に着手することになる．学童保育教室設置を要望していた和田は，教育委員会の勧めにより子どもの通う小学校の PTA に協力を要請した．だが，予想に反して「時期尚早」と協力を拒んだ PTA に疑問を抱いた和田は，組織内部を偵察すべく PTA 広報委員会に入った.「そこで問題になってたことは，校長と PTA 会長が一緒になって，広報部があげた原稿を気に入らないと没にしちゃうとかそういうことだったんです」（聞き取り 2013.11）と，PTA 改革に着手した契機を語っている．和田はこの活動報告を「PTA 改革の戦略・戦術」として『わいふ』に 2 年わたり連続投稿（『わいふ』1971 年 87 号から 1972 年 109 号）している．和田は疑問が生じれば問題点を明確にしようとし，問題解決のためには行動を起こすことを厭わない女性だった.

PTA 役員となった和田は，組織に問題が蔓延する背景には，それを支える母親たちの組織上層部に判断をゆだねて疑問を抱かない，いわば「お任せ」主義による思考停止があるとみるようになる.「その時に，普通の女性が本も読まず，何も知らないことに驚いた．とにかく会議ができないんですよ．そこで一言も言わないんですよ．言わないでいて，下駄箱の所で色々と言うわけね」と批判的に語っている（聞き取り 2013.11）.

それでも，和田の周囲には疑問を抱く母親たちもおり，和田はこうした女性たちを巻き込み，まず校長と癒着している PTA 会長を交代させることに着手した．保護者は子どもが多いほど回数多く PTA 役員を引き受けることになり，幾度となく役員を担った者が「ボス」つまり権力者になりがちであると看破した和田は,「子ども 1 人につき役員 1 回」という仕組みを提案し，保護者の支持を得て「ボス」が生まれることのない制度を作った．こうした経緯について和田は「そのとき私は，政治ってのは，要するに知恵を出してうまくやらなければ駄目なんだってことを覚えたんです」（聞き取り 2013.11）と語っている．特段の計画もなく声高に主張するだけでは人を動かすことはできないと気づいた経験だった.

当時の「普通の女性」への批判的認識や，変革を遂行するために必要な政治性という考えは，後に「男女平等とか女性の社会参加を考えるんだったら，まず現在の女性の状況を記録する」（聞き取り 2013.11）ような地道な努力が必要だという方向に向かった．それは，社会運動についての,「個人的にできることはほんの僅かなんですよ．だから，それが行くべき道に乗っているかどうかってだけの話なんです」（聞き取り 2015.2）という和田の持論に基づいている.

1971 年に関西から東京に戻った後にも，和田は PTA 改革経験から教育問題に関心を持ち続ける．東京での小学校の PTA 活動を通して田中喜美子と知り合い，田中の誘いで全国 PTA 問題研究会 [20]（以下「全 P 研」と略記）発足から運営委員および事務局員として活動し，会誌『PTA 研究』

の編集にも携わった．だが，必ずしも和田はこうした活動に充足感を得ていたわけではなく，その当時の心理状態について以下のように述べている．

> 私はもう 40 歳を過ぎ，いまだこれといって身についたものもない人間なので，知り合いの同年輩の奥さんが，ヤレ大学へ入ったとか，何々の資格をとったとか，語学をやっているとかいう話を聞くと，正直言って浮足立たずにはいられない気持ちがある．（『わいふ』1973 年 117 号 : 20）

専業主婦となって 10 年が過ぎ，育児が一段落したこの時期に，和田は漠然と書くことを仕事にしたいと思ってはいたが，具体的な方法や目標を見いだせずにいた．『わいふ』への投稿が高い評価を得ても，あるいは PTA 活動で成果をあげても，成功経験として記憶に残り自信につながりはするが，これらは一般には個人のキャリアとして積み上げられる類のものではない．目標をもって行動を起こした周囲の女性たちをみては，和田が焦りを感じ落ち着かない気持ちになったのも当然である．自立的な生き方を目指す行動的な和田にとって不本意な状況であったことは間違いない．

3 「過激派」と自称するアクティビスト――田中喜美子のライフヒストリー

3-1 「上流階級」・超高学歴女性

田中喜美子は和田に 1 年遅れた 1930 年に大蔵官僚の父親と地方の大地主の娘である母親の間の次女として東京都に生まれた．新宿区の 1,100 坪という敷地内に，田中ら家族の家とは別に，金融界の大物だった祖父 [21] と祖母が使用人と共に住む家があった．二人姉妹の姉が結婚して家を出たため，田中は結婚に際して夫の姓に改姓はしたが，いわば「家付き娘」として現在まで実家に住み続けている．

単に富裕層というだけでなく，「久原房之介 [22] の娘が」，「吉田和子 [23] が」などという語りが頻繁に現れるように，田中はいわゆる上流階級に属する女性でもある．姉澄子は御木本真珠店（現・ミキモト）創業者御木本幸吉の直系の孫 [24] と結婚しており，母方の実家では大臣 [25] を出してもいる．

田中と姉澄子は幼稚園から女学校まで雙葉学園 [26] で学んでいるが，田中は雙葉小学校附属幼稚園入園後に小児結核に罹患し，同時期に父親のロンドン赴任に母親も同行したため栃木県の母方の祖父母に預けられ，雙葉小学校に復学するまでにブランクがある．復学後に雙葉高等女学校に進学したが，2 年時には戦時下で勤労動員され，同じ頃，和田好子が銃弾に火薬を詰めていたように田中は発電機を作っていた．やすりをかけハンダ付けをしたりと単純な作業だったが，「文学好きな工員がいたりしてね，議論したりして面白かった」（聞き取り 2014.12）と語っている．その後空襲が始まったために 3 年時には母方の実家に疎開した．和田一家は家屋を焼失したが，田中の自宅は類焼を免れたので家族は終戦後すぐに東京に戻ることができた．しかし，田中は 17 歳で結核が再発したため，地方のサナトリウムで 1 年間療養生活を送り，結核は完治し東京に戻ったものの，結局，雙葉高等女学校は退学している．このように少女期の田中は病弱で女学校も退学せざるを得なかったが，どのような状況にあっても「面白いこと」を見つけるような楽

天的な少女だった．

東京に戻ってからは，ピアノを習い[27]，フランス語を学び，久原房之助邸[28]で行われていたダンス教室に通うなど気ままな生活をしていたが，転機は 20 歳の頃，久原邸のダンス教室で同年齢の早稲田大学の女子学生に出会ったことだった．田中はその女性に触発されて早稲田大学受験を決心した．女学校を中退したため，大学入学資格を取得する必要があり，田中は 1 年間予備校に通い大学入学資格検定試験に合格した後，23 歳で早稲田大学仏文科入学を果たした．男子学生が大半を占める予備校でも，田中は成績上位者として常に名前が張り出されるような頭脳明晰な女性であり，「結構勉強したんですね，考えてみると」（聞き取り 2014.12）というように才能の上に努力を重ねることができる女性でもある．

23 歳での大学受験という事態に対して，両親は何も言わずに学費を出してくれた．「父親は無頓着で面白い人なんだけど，母親もあれこれ言わず，結婚しなけりゃいけないとも言わず，やらせたい放題」（聞き取り 2014.12）という両親の下，逆に自ら考え行動しなかったならば「お嬢さん」のままだったろうと語っている．田中は「お嬢さん」を，裕福な家に生まれた育ちの良い女性という肯定的な見方はせずに，世間知らずで「少しトンマ」な，つまりやや分別に欠ける人間と捉えており，しかも後者の意味での「お嬢さん」だったと自認している．

早稲田大学仏文科に入学した田中はフランス文学研究者を目指して大学院にも進んだ．この頃の女性の大学進学率[29]に加えて大学院進学も考慮すれば，田中は当時の超高学歴女性といえる．研究者を目指し大学に通う中で，田中は 1956 年 26 歳で知人の紹介により知り合った物理学者と結婚する．田中は夫に結婚相手として選ばれた理由を「あの人学者だから，そんなに馬鹿な女じゃ嫌だと思ってたし，この人やる気あるし，やろうと思えばやる人なんだなと思って，それで結婚する気になった」（聞き取り 2014.12）と語っている．大学入学資格検定試験を受けて早稲田大学に入学した田中を，夫は意欲と知性という点で高く評価していた．田中も「あの人を選んだのは間違ってなかった．なぜかというと，人の言わないことを言う人だった．それが好きだった」（聞き取り 2014.12）と，他人に迎合せず自らの意見を述べるような夫に好感をもったと語っている．和田同様『わいふ』300 号（2003 年）の記事に田中 31 歳の頃の夫妻の写真が掲載されている．比較的大柄な田中が，より高身長の夫に寄り添う写真からは似合いの夫婦という印象を受ける．

このように望ましい男性と結婚した田中は，その一方で研究者としてのキャリアを手放してしまう．結婚 2 年後に夫のアメリカ留学に同行したため，研究者を目指して進学した大学院を退学することになったからである．「主婦なんかになっちゃったから悪いのよ，私が」（聞き取り 2014.12），「駄目な話っていうのは，日本に帰って子どもなんか産んだってことなの」（聞き取り 2013.09）などと，結婚・出産を経て研究者になる意欲を失った様子を語っている．加えて，富裕層の田中は和田ほど切実に自立的経済力を求める必要がなかったこともキャリアを手放した一因であろう．

3-2　社会運動に向かうベクトル――PTA 活動からウーマン・リブへ

2 年半ほどでアメリカから帰国した後，田中は 1961 年に 31 歳で男児を出産した．敷地内の別棟に両親が住み使用人もいたことから，育児は一定程度人任せにして「ミルクぐらいやったり，

面倒見たり，おむつ替えたり，それはしたけど，（子どもは）念頭になくて自分のことばっかり考えてて，ピアノ弾いたり，フランス語やったりして」（聞き取り 2013.9）いたが，夫に対しては「ちゃんとなんかやってないけど，ご飯作ったり，帰って来た時に家にいるとかってことは，やってましたね」（同）と語っている．このように家事・育児にさして煩わされることもなく，気ままに暮らしていたかにみえる田中は，実はこの時期の生活は「つまらなかった」と言い，それは「誰かの妻になるとか，誰かの母親になるとか，いつも誰かのなにか」（聞き取り 2013.9）であることに起因するものだったと語っている．

とはいえ田中はこの時期にアテネ・フランセに通い，翻訳者として日本の近代詩のフランス語訳に取り組み翻訳書[30]を一冊上梓している．しかし，実際にはそれも本意ではなかったようで以下のように語っている．

> 文筆業者になろうとしたけど，自分で書くほどの熱意もないし，力もないから翻訳者にってことなんですよね．（中略）身体が弱くて勤めをもつ職業人になるっていう選択肢はないから．職業婦人ってのは，夫に恵まれない可哀想な人がなるんだっていうか，（そうした考えが一般的で）今と全然違いましたしね．（聞き取り 2014.11）

ここで言及されている，夫に恵まれない可哀想な「職業婦人」[31]という女性労働者への差別的表現は，実際には高度経済成長期における女性雇用者の増加につれてなくなっていくが（鹿野 2004: 27），1960 年代当時の田中の周囲には，こうした意識が一定程度残存していたのだろう．「職業婦人」になるという選択肢はなく，出産を経て大学院復学への意欲を失い，文筆業を生業にするには自信が持てず，とはいえ妻・母役割にも満足できないまま，田中は次なる目標を探しあぐねていた．

このような状況下，田中は，1968 年頃には子どもの通う小学校の PTA 活動に関わることになる．和田同様，田中も PTA 組織の不合理な状態に疑問を抱いていた．田中は誘われて「全 P 研」に参加し運営委員になる．これが田中の「市民運動への第一歩」（『Wife』2006 年 321 号 : 5）だった．その後は，区画整理に伴い古い町名を廃止する動きに反対する「全国地名保存連盟」（1978 年）や「女性による民間教育審議会」[32]（1983 年）など，複数の社会運動の立ち上げにかかわり，自ら事務局を担ってもいる (聞き取り 2014.11).

「全 P 研」は開かれた研究会で様々な階層の人々が集まったため，女性差別発言を繰り返すような男性がおり，あるいは女性たちだけが当然のように事務局の雑用を引き受けているといった状態だった．若年時に職業経験のない田中は，ここで初めて男性中心社会の現実を知り女性差別にも直面したのである．結婚後も生家から出ることなく，いわゆる「お嬢さん」暮らしの延長上の専業主婦という生き方を振り返り，自らの現実理解の未熟さを痛感する機会となった．

経済的に豊かな「上流階級」の女性であることを考えれば，消費や社交中心の生き方を選んだとしても不思議ではないが，田中は賛同する社会運動に積極的にコミットする女性だった．その理由について「私は次女だから．次女って反抗的なのよ．なんとなくね，体制に反逆するっていうたちがありますよね」（聞き取り 2014.11）と語り，加えて「じゃじゃ馬」で「はねっかえり」だったからだと自らの性格をあげる．また，前節で示したように，田中の両親は子の行動に干渉

し特定の生き方を押し付けるといったタイプではなかったので，社会運動に取り組んでも特に反対もしなかった．これらの理由に加えて田中は，結婚後も実家に住み続けていたため，活動できる時間的，精神的な余裕があったこともあげている．いわゆる「嫁」の立場で義父母と同居しているような環境では，女性は様々な制約があって社会運動に自由にコミットすることは難しい．さらに安保闘争（1959 年から），「ベトナムに平和を！市民連合」発足（1965 年）に象徴される反戦運動，学生運動（1968 年から），ウーマン・リブ運動（1970 年から）など 60 年代から 70 年代の社会の動的な状況や時代的機運もあった．

結婚・出産を通して自己実現の方向転換が必要になり，次なる目標を探しあぐね，社会運動に関わっていた状況下で田中は和田と出会い，和田の提案を受けて『わいふ』編集・発行を引き受けることになる．その理由を田中は以下のように語っている．

> 当時の私は，典型的な「専業主婦」の生活を送っていた．細々と翻訳の仕事を続けてはいたものの，時間はあり余っていた．息子は 9 歳になっていて手がかからない，「主婦業」などは「仕事」のうちに入らない．私は何かをせずにはいられなかった．（『Wife』2013 年 362 号 : 92）

どんな状況でも「面白い」ことをみつける田中であっても，専業主婦としての生活は「つまらない」としか感じられないものだった．育児期が終了し，それまでに増して時間的余裕が生じる中で，田中はまさに「面白い」ことを模索していたとみられる．そしてこの後に田中は「国際婦人年」（1975 年）を背景に活発化した女性活動グループをあげ[33]，「『わいふ』の編集を引き受けなかったら，私は間違いなくこれらの組織のどれかに加入していたことだろう．そもそも私は気質としては『過激派』なのだ」（『Wife』2013 年 362 号 : 93）と述べている．PTA 活動を経て田中の眼は社会に向いており，『わいふ』を引き受けた理由も田中に内在する社会運動へのベクトルと無縁ではない．

田中と和田は 1971 年に小学校の PTA 活動を通して知り合いすぐに意気投合した．なぜなら，両名は同年代で東京に生まれ育ったため感性が似ており，戦時下の経験など同時代的な記憶を共有し，さらに，田中は大学・大学院で文学を専攻し，和田には豊富な読書経験や速記の仕事を介した文学的知識の蓄積があったからだ．当時田中は「女性たちが本当に読みたくなるような婦人雑誌を作りたい」（前みつ子編 2013: 19-20）と考え，和田を誘って「コネ」のある出版社に企画を持ち込んでみたが断られるという経験をしている．和田は既存の出版社からの雑誌発行は困難と知った田中に，自らが会員で廃刊が予定されていた投稿誌『わいふ』を主婦にも発行可能な雑誌として勧め，両名は 1976 年から 30 年間，同誌の編集・発行を担っていくことになる．

4　考察

和田好子と田中喜美子は同世代に属し，ともに高学歴で余裕のある層の女性たちだった．とりわけ注目すべき共通点は，両名が出会った 1971 年当時には，共にライフコース上の育児終了期にあって主婦ライフスタイルに不全感を抱いていたことである．この時代には高度経済成長期を通して主婦という生き方が女性の一般的なライフスタイルモデルとして定着していた反面，天野

（1979）が「第三期の女性」問題として示した，女性の中年期が大幅に伸長した結果生じる育児終了期の主婦の不安感が表出し始めていた．さらにフェミニズムの言説や主婦の「パート化」の影響もあって，1970 年代から 80 年代は戦後の女性の安定的な生き方が揺らぎ始めた時代といえる．田中と和田はこうした時期に育児終了期を迎え，生きる方向性を探っていたことがライフヒストリーから読み取れた．

とはいえ，両名は必ずしも同世代女性のマジョリティとはいえず，わけても田中は一般的な主婦とはかけ離れた存在だ．恵まれた環境の者がなぜ不全感を抱くのか．田中や和田と同世代の女性であっても，職業をもち結婚しないという生き方を選択できた者が両名のような葛藤を抱える可能性は低い．また，女性にとっては主婦という生き方が当然と考え，比較する生き方モデルをもたなかった者は，不満があっても妥協し折り合いをつけていき，アイデンティティの危機といった事態にはなりにくい．対して，結婚・出産を経験して葛藤を抱いた時に，比較可能な生き方モデルをもち現状とは異なる自己像を描ける女性は，主婦ライフスタイルに問題意識をもちやすい．田中と和田は後者の典型例である．田中は大学院に進学して一度は研究者を志ざし，和田は自立可能な職業を持っていたことから，両名にとってフェミニズムにより提示された「主婦ではない人生」や「キャリアを積む自分」といった人生像はリアリティをもっていたからだ．このようにみれば，恵まれた環境にある主婦であっても不満をもつことに矛盾はない．両名は，いわば女性の一般的なライフスタイルに問題を「発見」しやすい層の女性だったと考えられる．

では，両名は実際にどのような葛藤や困難を抱え，いかにしてそれらが主婦ライフスタイルから生じる問題であると認識したのだろうか．和田好子は時代的な制約の中にも自立を求めてきた女性である．女学校の教育および読書経験が和田の自立を志向する意識形成に影響したと考えられ，長じて女性でも自立可能な職業と知って速記者になっている．加えて，両親の離婚から学習したせいか，和田は結婚相手によって女性の生き方が制限される可能性に若年時から自覚的だった．それにも関わらず，和田は必ずしも結婚せずに職業をもち自立して生きようとしたわけではなく，結婚それ自体が女性の自立的な生き方を阻害するといった考えはなかった．女性にとっての結婚が生活保障の場という意味合いの強かった時代にあって，その中でも自立的に生きようとしたのが和田である．

そうした観点から妻の生き方に干渉／制限しないタイプの男性を夫に選んだものの，和田にとっての困難は孤立した育児だった．育児の辛さを綴った『わいふ』への投稿は，和田の冷静なイメージに似合わぬ感情的な内容であり，単に育児の辛さだけでなく自らの生き方が失われてしまうことへの不安が読み取れる．先見の明がある聡明な和田であっても，夫の転勤に伴う転居や孤立した育児などで，結局は自立的な生き方を失ってしまった．しかも，「書くこと」を仕事にしたいと願っていた和田は転居によってその機会も失い，育児終了期にはそうした希望が実現しそうもないと気づいて，周囲の女性たちの自立に向けた動きに焦燥感を抱いていた．このように，和田にとっては，自立的な生き方の喪失が主婦ライフスタイルから生じる問題と認識されていた．

他方，田中喜美子は消費や社交といった富裕層的生活が可能な中にあっても社会運動に関心を寄せる女性だった．田中のライフコース上で注目されるのは 23 歳で有名大学に入学したことである．一般的には女学校を退学したことが田中のライフコース上の重大な瑕疵になるとは考え難い．それどころか女性の高学歴が結婚の障害となりかねなかった時代に，大学入学資格検定試験

を受けてまで大学・大学院に進んだのは，裕福な家庭の世間知らずで「少しトンマ」な「お嬢さん」ではなく，知的な女性であることが田中にとって重要だったということだ．それは，学者である夫が「そんなに馬鹿な女じゃない」ことを理由のひとつとして田中と結婚したと，田中自身が語っていることからも推測できる．だが,知的な女性であることが重要であっても,「職業婦人」という選択肢がなかったのであれば，田中は必ずしも職業としての研究者を望んでいたわけではなく，キャリアを失ったことについても，和田のほどの喪失感はなかったかもしれない．

では田中にとっての問題は何かといえば，知的であることがさほど必要とされない主婦という生き方は「つまらない」としか感じられないことだった．「主婦なんかになっちゃったから悪いのよ，私が」という田中の語りには，「何者でもない自己」,「大したこともできなかった人生」という現実への悔いが透けてみえる．しかし実際には，主婦で仏語翻訳をするような女性は少ないという点に考えが及んでいない．こうしたことから田中の葛藤は，自らの周囲にしか比較対象をもたないために生じる「相対的剥奪」として捉えられる．田中には，まず主婦という生き方に価値を見いだせないという絶対的な不満があり，さらに「別な私，別な人生」があったのではないかという相対的な不満がある．つまり，人に羨まれるような環境であっても，田中には相対的剥奪によるアイデンティティの揺らぎという困難があり，それは主婦ライフスタイルを選択した自らの落ち度と認識されている．

両名の邂逅は 1971 年で，同誌の編集・発行を開始した 1976 年には，田中が 46 歳，和田は 47 歳だった．「主婦のパート化」が顕著になったとはいえ，高学歴であっても職業キャリアのない田中や長いブランクのある和田が，やる意味が感じられる仕事を得る可能性は低く，かといって家計補助的就労の不要な両名が単純労働の「パート」で満足するとも考えにくい．しかも両名にとって，育児終了後，すなわち人生の第三期以降も家族のケアを主な役割として生きることは納得できないことだった．そうした状況下で和田が提案し両名が選択したのが投稿誌『わいふ』の編集・発行だった．両名とも必ずしも当初から明確なビジョンをもっていたわけではなかったが，和田は同誌が仕事につながる可能性に，田中は活動という側面に期待していたとみられる．つまり両名のもつベクトルの一致した先が偶然にも同誌だったのだ．数年後には会員が増加して経営も安定し，単なる投稿誌に留まらず，葛藤を抱える主婦の問題提起／共有の場としても機能するようになり，同誌は両名にとって意義ある活動となっていった．

両名が結婚・出産・育児を経験した 1950 年代から 60 年代は「主婦化」（落合［1994］2004: 18-22）が進行した時代である．主婦であることが女性の生き方として広く受け入れられていた時代にすでに,両名は主婦ライフスタイルに生じる生き難さを意識していた．それは,和田にとっては育児による自立的な生き方の喪失であり，田中の場合は恵まれた環境にある主婦の相対的剥奪としてのアイデンティティの揺らぎだった．こうした類の困難は，その後に続く世代の女性たちにさらに顕著になっていった．俯瞰すれば,これらの主婦として生きる女性たちの生き難さが,次第に主婦の問題として社会に認識されていく流れの中に，その生き難さへの気づきが重要な画期を作っていった．田中と和田はそうした画期を作った女性たちの先駆けだったといえよう．

5　おわりに

本稿では，田中喜美子と和田好子のライフストーリーをライフヒストリーに組み直し，主婦というあり方への両名の問題意識が,投稿誌『わいふ』を通した活動へとつながるプロセスを分析・検討した．主婦の問題が表面化する以前にすでに主婦というあり方に疑問をもち，ユニークな活動を展開した両者は戦後主婦を考える上で興味深い存在である．

多くの共通点により構築された良好な関係性，和田の職業経験や田中の上流階級ネットワークといった両名がもつ異なる資源，第二波フェミニズムの興隆などを要因として同誌発行が軌道に乗ると，専業主婦だった両名は次第に主婦ではなくなっていく．また，主婦への支援も，誌上だけではなく，実際に同誌会員をライターとして育て，あるいは仕事先を斡旋するなど，その内容が変化していき，両名は同誌発行を中心に多様な活動を 70 歳代後半まで担うことになる．両名のライフコース後半については稿を改めて論じたい．

［注］

1)「主婦」は多義的な用語であるため，本稿では「ジェンダー規範により家族のケアを主要な役割として担う既婚女性」と定義し，家族のケアを優先する妻・母というライフスタイルを「主婦ライフスタイル」とする．この定義では職業を持つ／持たないことによる区別はないので，特に無職の主婦を強調する場合は「専業主婦」と表記する．

2) 1980 年代に入ると主婦として生きる女性に特徴的な生き難さの問題が『妻たちの思秋期』（斎藤 1982），『主婦症候群』（円 1988）等により一般にも注目された．金井（1991）は 80 年代の「主婦症候群」を，主婦が家庭の場で生きている意味を見いだせなくなり，家庭の外に「ふわふわと浮遊しはじめたような状況」（金井 1991: 192）と説明している．

3)『わいふ』は主婦のための会員制の投稿誌として 1963 年に創刊され，3 人の編集長の交代を経て現在まで 50 年以上発行され続けている．編集長の交代を機に誌面構成や編集方針の変化がみられるため，第 1 期（1963 － 1975 年），第 2 期（1976 － 2006 年），第 3 期（2006 －現在）と区分可能であり，田中喜美子と和田好子が各々編集長，副編集長として編集・発行を担ったのは第 2 期である．第 2 期は 30 年という長期に渡り，会員は全国に広く存在し，発行部数等からみても同誌の最盛期と位置づけられる．

4) 第 1 期と第 2 期は『わいふ』だったが，第 3 期には『Wife』へと誌名が変更されたため，それぞれの期に対応して『わいふ』と『Wife』を使い分け,全体を指す場合は『わいふ／ Wife』と表記する．

5) ライフヒストリー法については中野（1995），佐藤（1995），桜井（2002）を参照した．

6) 現在は神奈川学園中学校・高等学校.

7) 高等女学校は 1899 年の「高等女学校令」により制定された「賢母良妻」になるための基礎教養を授ける教育機関である．小学校よりも高等であるという意味での高等普通教育であって，実際には中等教育機関であった（高等女学校研究会編 1990: 12-13）.

8) 神奈川学園の創立者佐藤善次郎は「一，女子に自ら判断する力を与ふること，二，女子に生活の力量を与ふること」の 2 点を建学の理念とした．（神奈川学園中学校・高等学校ウェブページ http://www.kanagawa-kgs.ac.jp/school/about/spirit.html　2014.11.30）.

9) 箕作元八，1920,『フランス大革命史』冨山房.

10) 高等女学校卒業後に女子高等師範学校や女子専門学校等の高等教育機関に進学する女性は戦前期を通して 1％にも満たなかった（稲垣 2007: 7）.

11) 当時の高等女学校の就学期間は学校により 3 年から 5 年という幅があり（稲垣 2007: 4），神奈川高等女学校は 4 年制だった.

12) 和田が職員として働いた 1946 年頃，童心座は小学館の宣伝のための劇団だった（和田への聞き取り 2014.11）.「日本人形劇人協会」（1967 年設立）のウェブページでは，森昌二前常任理事を「1946 年に小学館役員浅野次郎氏らと劇団童心座を結成して小学館巡回子供会で全国各地を巡回公演し 1954 年童心座代表となった人物」と紹介している（日本人形劇人協会ウェブページ http://www.ningyogekijin.jp/explanation1.html　2015.1.17）.

13) 例えば和田は浜田広介をあげている．浜田広介（1893-1973）は山形県出身の日本の代表的な童話作家で，幼年童話の創始者ともいわれている（関口編 2008: 128-129）.

14) 俳優座の機構・運営の説明によれば，俳優座演劇研究所は養成部と研究部とにわかれ，研究部には演劇論研究会，戯曲研究会，音楽劇研究会がある（俳優座ウェブページ http://www.haiyuza.net/ 2015.1.5）.

15) 田鎖綱紀（1854-1938）は日本語における速記術の創始者であり，日本の速記の始まりは田鎖が新型の筆記法の指導を開始した 1882 年と定められている（兼子 1999: 24）．田鎖速記研究所は現在の専門学校のような存在であり，授業内容は高度で，100 人の受講者中受級者は 3 人程度だった（和田への聞き取り 2014.11）.

16)「経済時代社」とは雑誌『経済時代』（1952 年創刊）の出版社である（松本 1958）.

17) 和田が「経済時代社」に雇用された当時の国勢調査（1955 年）の職業（小分類）には「速記者，タイピスト，筆耕」という区分があり，その就業者数は全国で 56,451 人，内女性が 50,689 人で，圧倒的に女性の多い職種だった．この職種は 1970 年の 89,690 人をピークに減少し始め，2005 年版には「速記者，タイピスト，ワードプロセッサ操作員」が 13,350 人で，2010 年版には速記者の含まれる項目がなくなっている.

18) 和田は「経済時代社」時代は被雇用者で月給だったが，加えて時間外に個人的に受けた速記の収入があった．個人的に受けた速記の料金は持ち帰っての復文作業（文字に起こす作業）も含めて，1 時間のインタビューにつき 2,000 円から 3,000 円だった（聞き取り 2014.11）．和田が結婚した当時，1959 年の『賃金構造基本調査結果報告書』（労働省労働統計調査部）によれば，従業員 10 人から 99 人規模の企業では 25 歳以上 30 歳未満の女子労働者の平均月給額は 8,395 円である．和田の月給がこの額だと仮定すれば，例えば月に 4 回速記を引き受けると 16,000 円程度から 20,000 円前後の月収になる．この金額は，同調査の従業員 1,000 人以上規模の企業で働く 25 歳以上 30 歳未満の男子労働者の月給平均 17,973 円と比較しても遜色なく，収入が夫と同程度だったという和田の語りを裏付ける.

19) 和田への聞き取りでは具体的な語りはなかったが，田中への聞き取りで，和田から聞いた話として「彼女速記者だったんですよ．自分の仕事する部屋の隣でガヤガヤしてる連中がいろんなことしゃべってるのを聞いてね．あの時いい思いしたなとかね．中国行って女を強姦したとかね．面白そうに話してたんだって」（田中への聞き取り 2014.11）と田中が語っている.

20) 1971 年に，宮原誠一，丸岡秀子ら『呼びかけ人』により発足した．PTA の原点に立ち活動しようとする人たちが，PTA の枠を越えて集まり，PTA に関する諸問題を本格的に研究していこうとする実践的な研究団体であり『PTA 研究』は会誌である（全国 PTA 問題研究会ウェブページ http://www.k3.dion.ne.jp/~zenpken/ 2014.11.12）.

21) 伴野乙弥．水戸鉄道社長，日本興業銀行設立時理事等を務めている．

22) 久原房之介（1869-1965）は 1905 年に日立鉱山を開業し，1912 年には久原鉱業日立製作所を開設し，1928 年には立憲政友会に入党して衆議院議員に初当選した，実業家で政治家（古川 2004）．田中には久原の娘と共通の友人がおり，その関係で久原邸にて開催されたダンス教室に通っていたと語っている（聞き取り 2014.12）.

23) 吉田和子（麻生和子 1915-1996）は，元総理大臣吉田茂の娘であり，財務大臣麻生太郎（本稿執筆時点）の母である．田中は姉の紹介で吉田和子に会ったと話している（聞き取り 2014.12）.

24) 御木本幸吉の後継者御木本美隆.

25) 植竹春彦元郵政大臣（1898-1988）.

26) 雙葉学園はカトリック系の学園で，1872 年に来日した 4 名の修道女により開設された孤児院・寄宿学校がその前身である（学校法人雙葉学園ウェブページ http://www.futabagakuen-jh.ed.jp/gakuen/fb-development.html　2016.12.5）.

27) 本間（2012）の研究によれば，昭和初期のアップライトピアノは一般家庭で購入できるような価格ではなく，価格が下がり割賦販売の利用もあって一般家庭でも購入可能になったのは高度経済成長期以降である（本間 2012: 37-39）．田中と姉は 5,6 歳の頃（1930 年代）からピアノを習っており，姉は 20 歳でピアニストとしてデビューしている．こうしたことからも田中の実家が富裕層であることがわかる.

28) 現在のレストラン・結婚式場㈱八芳園．久原房之介は東京での活動のための別荘にと 1915 年にこの地を入手した（古川 2004: 196）.

29) 田中が大学に入学した頃，1954 年の女性の大学進学率は 2.4％，短大を含めても 4.6％である（学校基本調査年次統計 2014 年 8 月 7 日公表．http://www.e-stat.go.jp/SG1/estat/List.do?bid=0000010015843&cycode =0 2014.8.15）.

30) 萩原朔太郎，宮沢賢治，金子光晴，三好達治らの作品のフランス語訳で書誌情報は以下のとおりである．Traduction de KIMIKO TANAKA・FRANÇOISE FERRAND,1974,POESIE JAPONAISE DU XXe SIECLE.

31)「職業婦人」という言葉は 1910 年から 20 年代にメディアに多く取り上げられ，その意味するところは，「男性の領域への女性の進出」や「女性の自立への意志」とともに「“ 世間 ” に身を晒すことで “ 良家の子女 ” たちからはみ出した女性」という蔑視を伴うものでもあった（鹿野 2004: 224）.

32)「女性による民間教育審議会」は，1984 年に中曽根康弘元首相により設置された臨時教育審議会の教育改革案に対して意見をいうと同時に，実現させたい教育改革案を提示することを目的として，1985 年に創設された．世話人代表，世話人らと並んで事務局として田中と和田の名前もある（女性による民間教育審議会編 1986: 2 および奥付）.

33)「婦人有権者同盟」,「婦人問題懇話会」,「国際婦人年をきっかけに行動を起こす女たちの会」等をあげている.

［文献］

天野正子，1979,『第三期の女性――ライフサイクルと学習』学文社.
――――，2001,「プロローグ――団塊世代の「もう一つ」の読み方」天野正子編『団塊世代・新論――＜関係的自立＞をひらく』有信堂高文社，3-37.
――――，2005,『つきあいの戦後史 ――サークルネットワークの拓く地平』吉川弘文館.
古川薫，2004,『惑星が行く――久原房之介伝』日経ＢＰ社.
原純輔・盛山和夫，1999,『社会階層――豊かさの中の不平等』東京大学出版会.
本間千尋, 2012,「日本におけるピアノ文化の普及――高度経済成長期の大衆化を中心として」『慶應義塾大学大学院 社会学研究科紀要』74: 33-54.
稲垣恭子，2007,『女学校と女学生――教養・たしなみ・モダン文化』中央公論社.
女性による民間教育審議会編，1986,『わたしは提言する――女たちの教育改革』国土社.
金井淑子，1991,『女性学の練習問題――“Hanako” と “ 婦人 ” のはざまで』明石書店.
兼子次生，1999,『速記と情報社会』中央公論社.
鹿野政直，2004,『現代日本女性史――フェミニズムを軸として』有斐閣.
国広陽子，2001,『主婦とジェンダー』尚学社.
高等女学校研究会編，1990,『高等女学校の研究――制度的沿革と設立過程』大空社.
円より子，1988,『主婦症候群』筑摩書房.
前みつ子編，2013,『投稿誌「わいふ」の 50 年――普通の女の証言集』めでぃあ森.
松本昇編，1958,『出版年鑑 1958 年版』出版ニュース社.
中野卓，1995,「歴史的現実の再構成――個人史と社会史」中野卓・桜井厚編『ライフヒストリーの社会学』弘文堂，191-218.
落合恵美子，[1994]2004,『21 世紀家族へ（第 3 版）』有斐閣.
斎藤茂男，1982,『妻たちの思秋期――ルポルタージュ日本の幸福』共同通信社.
桜井厚，2002,『インタビューの社会学――ライフストーリーの聞き方』せりか書房.
佐藤健二, 1995,「ライフヒストリー研究の位相」中野卓・桜井厚編『ライフヒストリーの社会学』弘文堂，13-41.
関口安義編，2008,『アプローチ児童文学』翰林書房.
高橋裕子，2005,「1946 ～ 50 年生まれの女性の「自分探し」――その感受性の変化を 1979 年代に見る」『立命館産業社会論集』41(1): 181-197.
豊田雅人，2013,「投稿誌『わいふ』50 周年の軌跡――半世紀に渡る女性たちの意見をまとめたアーカイブとしての意味」『21 世紀社会デザイン研究』12: 109-118.
――――，2014,「投稿誌『わいふ』における「主婦」の意味付けに対する考察」『21 世紀社会デザイン研究』13: 91-99.

Women Who Started to Question the Idea of Being a Housewife in Post-War Japan: Life Histories of Kimiko Tanaka and Yoshiko Wada

IKEMATSU, Reiko

The gendered division of social roles became highly institutionalized in society generally during the great economic growth period that occurred in post-war Japan, and being a "housewife" became a fairly common lifestyle among women. However, many women began to feel uncomfortable with their roles during the second-wave of feminism that gradually influenced Japanese society in the early 1970s, and the housewife lifestyle was seen as problematic, as was the case in other societies. In this study, the life histories of two women, Kimiko Tanaka and Yoshiko Wada, were examined; they lived as housewives from the 1950s through the 1970s, and later became very active as editors of the contribution magazine "Waihu (Wife)". This study considered how these pioneer women questioned their own lifestyle against the social background of the time. Waihu is a rare medium in which Japanese housewives freely discuss various matters of concern to this day. Although Tanaka and Wada lived comfortably while their children were growing up, they felt dissatisfied with, and experienced inner conflicts about, their role as housewives. Wada gave up her economic independence for child rearing, and Tanaka's self-identity vacillated due to relative deprivation when she compared her life with similarly highly educated and able women around her. Such difficulties were even more salient for women of the next generation. Wada and Tanaka contributed greatly to social awareness of the "housewife problem", an epoch-making development in post-war Japanese women's history.

Keywords: housewife, life history, women's magazine